

第5節 古代山陰道の推定ルート復元

第1項 はじめに

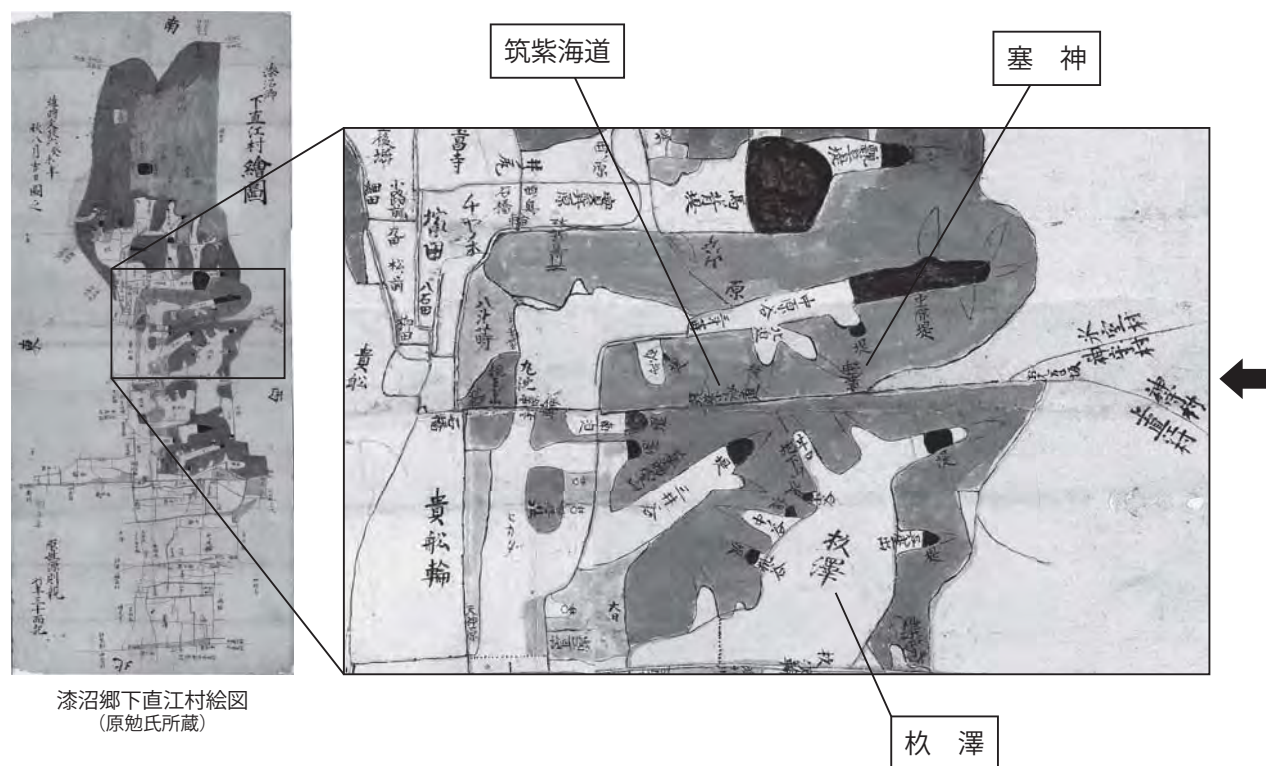
(1) 杉沢遺跡発見の道路遺構

杉沢遺跡D丘陵の尾根上で見つかった道路遺構は、両側に心々間距離9 mを測る側溝を備え、直進性を志向したものであった。このことから、奈良時代に築造された駅路である古代山陰道の一部である可能性が高いと考えられる(第4章第4節)。全国的にも、発掘調査された駅路で尾根を縦断する例はないことから、本節では杉沢遺跡周辺の尾根上のルートを復元し分析を行う。

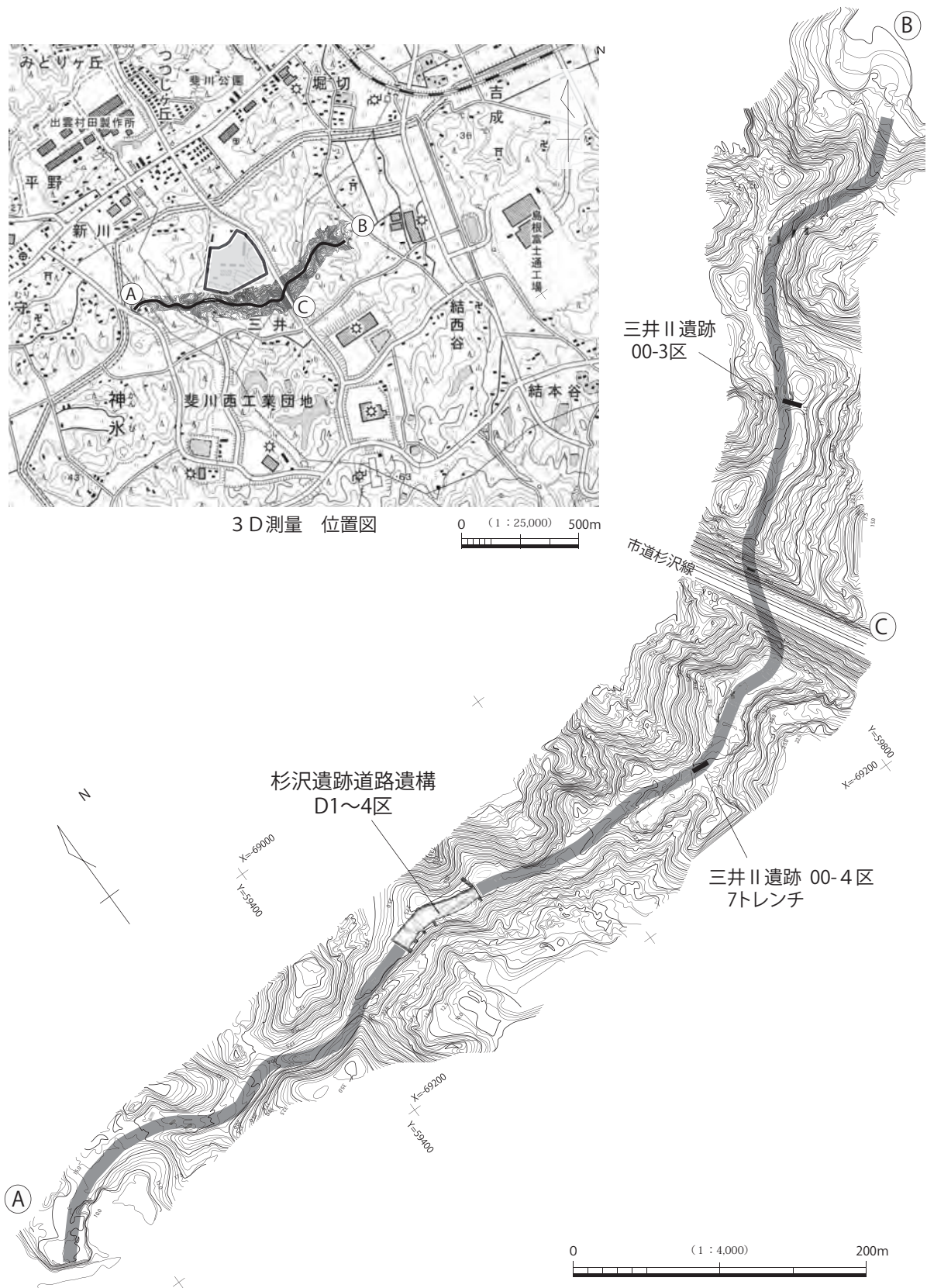
(2) 既存の研究

島根県東部の古代山陰道の推定ルートは、木本雅康が詳細な検討を加えており(木本2001・2011)、杉沢遺跡の周辺では今回見つかった道路遺構と重なる。ルート復元の根拠の一つが江戸時代の文政6年(1823)の『漆沼郷下直江村絵図』(原勉氏所蔵、第264図)である。この絵図にある「筑紫海道」が、尾根上を直線的に描かれていることも古代山陰道を踏襲した結果と考えられている。この「筑紫街(海)道」という名称は、地元では菅原道真が大宰府へ向かう際に通ったとの伝承があることから、都から九州まで繋がる道との認識があったと考えられる。

過去の杉沢遺跡周辺の尾根上の発掘調査では、平成11・12年(1999, 2000)の調査において、明確な遺構は検出できなかったが、時期は不明だが版築状の盛土や溝が見つかった(斐川24)。



第264図 下直江村の絵図 右図拡大(上が南)



第265図 尾根上ルート想定図

第2項 古代山陰道のルート復元

(1) 尾根上の推定ルート

杉沢遺跡を含む丘陵尾根上の古代山陰道を復元するため、平成26年度より追加調査を行っている。尾根上に想定される約1,000mの間について3次元レーザー測量を行い、詳細な地形図を作成した(第265図)。測量に先立ち、広範囲に下草刈りを行った結果、古代山陰道の造成工事跡と想定される切り通しの斜面等が見つかり、測量図の等高線にも表れた。

測量成果より尾根上の古代山陰道のルートを確認すると、当時の技術者が東西につながる丘陵の尾根を巧みに利用し、直進性、水平性を最大限考慮しながらルート設定した状況が伺える。

平野部ではなく尾根上を通るルートが設定されたかという点について、地理的要素、軍事的要素等が考えられる。杉沢遺跡は、出雲平野に舌状に張り出した丘陵上にあり、古代道の特徴である、「直進性」を貫いた結果、尾根上を通るルートが最短であったと考えることが自然であろう。

なお、尾根上の推定ルート上には三井Ⅱ遺跡があり、その調査(00-3区及び00-4区7トレンチ、第265図)においては、版築状の土層及び溝状遺構が一部確認されたが、報告書(斐川24)では古代の道路遺構であるかどうかの判断をするにはデータが不十分としている。

(2) 杉沢遺跡周囲の道路痕跡

丘陵上の杉沢遺跡を古代山陰道(駅路)が通ると確認できたので、その周囲の地形についても現地調査を実施した。

杉沢遺跡から東へ1.4kmのところにある香取神社の北側に幅9m前後の切り通しが2ヵ所ある。こ



第266図 推定路線の空中写真(米軍撮影1947年USA-R514-4, 46の一部)

のうち尾根の先端を一部残して道路を通した箇所があり（第267図）、その延長線は杉沢遺跡の調査地につながる。駅路が直進性をいかに重視したか伺える（第266図）。

西へ目を向けると、出雲郡家の関連施設として、正倉に比定される総柱建物跡などが後谷遺跡から見つかっているが、政庁域は不明である。『出雲国風土記』ではさらに西に行って斐伊川（出雲大河）に至り、神門郡家から多伎駅、石見国へとつながるが、そのルートも不明な点が多い。

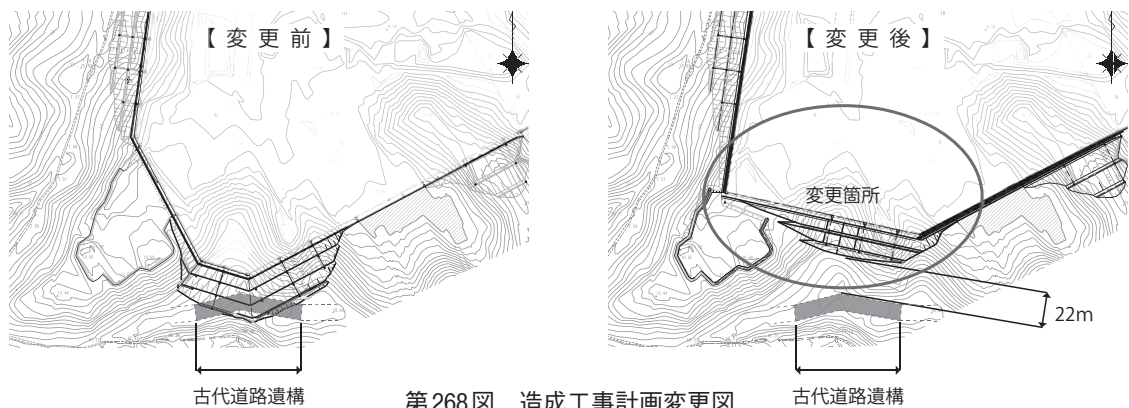
また、東へ向かっては、宍道駅家を経て、黒田駅家や出雲国府（松江市大草町）へと至る。出雲国府周辺では、国府跡の西6kmの松本古墳群（松江市乃木福富町）で切り通し状の遺構などが（島根県教育委員会1997）、措松遺跡では側溝が見つかった（松江市教育委員会ほか1997）。今後、古代山陰道のルートを復元するための調査を進めたい。



第267図 香取神社切通し

第3項 古代道路遺構の保存と今後

（1）工業団地の計画変更

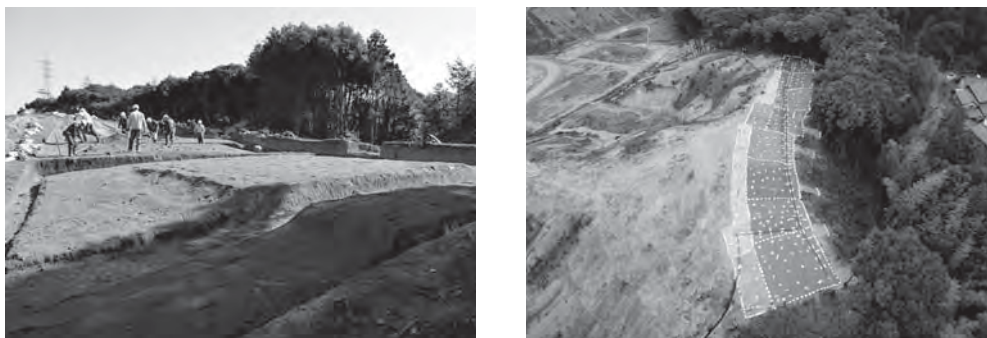


第268図 造成工事計画変更図

出雲斐川中央工業団地の当初造成計画では、道路遺構の部分は掘削され法面となる予定であったが、保存決定方針を受け、文化庁からは道路遺構周辺の地形もできるだけ保存するよう指導があった。これを受け、出雲市文化財課では、遺構の北端から22mの位置を保存ラインとし、関係部署との協議を行なった。その結果、第268図に示すとおりに設計が変更され、道路遺構部分と切り通した丘陵頂部他の保存が決定した。

（2）遺構の保存

道路遺構面の保護のため、文化庁、島根県教育委員会と協議し埋戻しを行った。遺構全体が覆われるよう人力で真砂土を厚さ10cm以上敷き詰め、その上に重機で掘削土を調査前の高さまで埋め戻した。雨水による埋め戻し土の流出を防ぎ、また南側のため池・民家へその水が流れ込まないようにす



第269図 埋戻状況・シート養生(西から)

るため、 $\phi 300\text{mm}$ のP型U字溝を設置し、工業団地内の排水路へつないだ(第269図)。

(3) 今後の調査と課題

出雲市では、平成26年7月に「出雲市杉沢遺跡等古代道路遺構調査委員会」を立ち上げた。古代道路遺構の規模、形態等の価値を把握するための調査に関する指導を受け、平成29年度の国史跡を目指して追加調査等を行っている。平成27年度からは、延長約1,000mの丘陵尾根上を東西2区に分割し、第1期として杉沢遺跡道路遺構を含む西側650mの区間に新規3ヵ所のトレンチ調査を実施するとともに、平成12年～15年に行われた調査のトレンチ4ヵ所の再精査を行った。これらの調査成果については平成28年度末に報告書を発行する予定である。

また、課題については、古代山陰道(正西道)が杉沢遺跡を通る場合、『出雲国風土記』の記述によると、正西道(山陰道)と枉北道(きたにまがれるみち)との合流地点は出雲郡家の東の辺(ほとり)である。出雲郡家関連遺跡(小野遺跡・稲城遺跡・後谷遺跡)は杉沢遺跡南西方向にあるため(第266図)、直進性を貫いて尾根上を通した駅路と出雲郡家政庁との位置関係がどうなるのか、これも発掘調査による解明が待たれる。

(江角 健)

【参考文献】

- 加藤義成校注 1965『出雲国風土記』報光社
- 木本雅康 2001「出雲国宍道・狭結駅間の古代駅路」『杉沢Ⅲ・堀切Ⅰ・三井Ⅱ遺跡発掘調査報告書』
- 斐川町文化財調査報告24 斐川町教育委員会
- 木本雅康 2011『古代官道の歴史地理』同成社
- 古代交通研究会 2001『古代交通研究』第10号
- 島根県教育委員会 1997『松本古墳群 大角山古墳群 すべりざこ古墳群』一般国道9号松江道路(西地区)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書
- 島根県古代文化センター編 2015『解説出雲国風土記』
- 斐川町教育委員会 1996『後谷Ⅴ遺跡』斐川町文化財調査報告15
- 福岡市教育委員会 2002『高畑遺跡―第18次調査―』福岡市埋蔵文化財調査報告書第699集
- 松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団 2006『渋ヶ谷遺跡群発掘調査報告書』